

聖書の中で最も悲劇的な人物の一人は預言者ホセアに違いありません。預言者のほとんどがそうだったように、ホセアもイスラエルの動乱と混乱の中で神の言葉を語りつづけました。

あの栄華と栄光を誇ったダビデとその息子ソロモンの王国が崩壊した後、イスラエルの民はエジプトとアッシリアによっていつ滅ぼされるかと戦々恐々としていました。

この混乱期に、人々は神への信仰を捨て去り、偶像の前に腰を折り、膝をかがめる日々を過ごすようになります。

ホセアはこの墮落した民に向かって語ります。我々の裏切りを前にして、神は非常に怒っておられる。

私は神の怒りを誰にも増して理解できる、とホセアは続けます。何故なら、私自身、妻に裏切られるという身を切られるような辛い思いをしているからだ。

ホセアの妻ゴメルは、幾人もの若いツバメの誘惑に乗り、夫と子供を捨てて、墮落と淫乱に身を持ち崩していたのです。

妻の不誠実を知ったホセアは怒り心頭に達します。彼の嘆きと嫉妬、そして怒りは以下の彼の言葉に明らかです。

「妻は言う。『私は愛人たちについて行こう。パンと水、羊毛と麻、オリーブ油と香油をくれるのは彼らだ。』」

ホセアは自分を捨てたゴメルに殺意さえ抱きます。

「私は彼女の衣を取って裸にし、生まれた日の姿にし、さらしものにする。また、彼女を荒れ野のようにし、乾いた地のように干上がらせ、彼女を乾きで死なせる。」

ホセアの怒りは留まるところを知りません。

「私は彼女が着ている羊毛と麻とを奪い取る。彼女を公衆の面前で裸にし、石で彼女を打ち据える。復讐、復讐、復讐。」

しかし、この救いようのない状況の中で、ホセアは、神の思いは何かを真剣に考えるようになります。その過程で、神の慈しみは怒りよりも強いことを知るのです。

「神は言いたまう。『ああ、ユダヤの民よ、どうしてお前を見捨てることができようか。ああイスラエルよ、どうしてお前を引き渡すことができようか。わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる。わたしは怒りをもって臨みはしない。』」

つまり、ホセアは、何とも形容できない暗闇のただ中で、神は憐れみの神、慈しみの神であることに改めて気づくのです。そしてホセア自身神の慈しみの器として召し出されていることに気づくのです。その時、ホセアの生きる姿勢に信じがたい変化が生じます。

何と、彼は自分の財産を売り払ってお金を造り、隣の町で娼婦に身を持ち崩しているゴメルを買い取るために、一人とぼとぼと歩き出すのです。

やっとゴメルを買い取ったホセアは、二人きりになるために荒野へと彼女をいざないます。

「私は彼女に言った。『お前は淫行をせず、他の男のものとならず、長い間私のもとで過ごせ。私もまたお前のもとに留まる。』」

そして彼女にしみじみ言います。「私はあなたとどこしえに契りを結ぶ。私はあなたと契りを結び、正義と公平を与え、慈しみ、憐れむ。」

これは実に驚くべき人間の物語です。そこから私たちは一つの大きな教えを学び取ることができます。これ以上の痛みや‘苦しみはないと思われる暗闇のただ中においても、神は私たちに人間らしさを堅持する選択肢をお与えになる。新しく出発する道を開かれる、ということです。

神の慈しみは怒りよりも強いのです。だから私たちは慈しみの器として生きる人生へと招かれているのです。

この信仰こそ、私たちの人生を根底から支える岩です。錨です。希望の根源です。